

廣洋和郎全集
卷之七

廣津和郎全集

才七卷

広津和郎全集 第七卷

定価四二〇〇円

昭和四十九年七月一日印刷
昭和四十九年七月十日発行

著者 広津和郎

発行者 高梨茂

印刷者 山元正宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

広津和郎全集
第七卷

目次

誘蛾燈

泉へのみち

あとがき

一六

七

小説
七

誘蛾燈

一

「甚だ突然ですが、ママが結婚しなさいというので、結婚することにしました。自分でも意外な出来事です。いろいろ考えても解らないので、思い切ってやって見る事にしました。結婚生活がどういふものであるか、いつか御報告する事もあるでしょう。それは先の事にして、そのお別れ、というところのお別れが少し曖昧ですが、これからはこの家に皆さんに集まって頂くという機会も自然になりますから、此処での最後の集まりのつもりで、来る土曜日の夕方からは是非々々枉げてお集まり願いたいと思います」

駒井愛子からこういう手紙を貰った女大学生の小森田みち子は、アルバイトに勤めている日比谷の弁護士事務所の帰

りに、牛込加賀町の高台にある昔の級友の家を訪ねて行った。集まったのはみち子の外には、久我みどり、大塚さき子、春日タマ子、吉葉幸枝。この中で吉葉幸枝は女学校を出ると直ぐ結婚して、今は子供であるが、他はみな未婚であった。二十畳敷き程の洋風の家族部屋、かたわらにピアノと電着、絨毯、硝子戸の外にはベランダがあり、その先には広い芝生の庭が見える。此処は日頃から級友達の集まったところなので、愛子が嫁に行けば、もうこの部屋に集まる事もなくなると思うと、誰の心にも一抹の哀惜の念が湧くのであった。

右の手紙の文句でも想像されるように、愛子は母の手で我儘いっぱい育てられた朗かな娘で、思った事を遠慮もなくズバリズバリ云う代りに、少しも毒がないので、皆から親しまれていた。日頃は独身論者で、「アブレゲールの若者なんぞ、おかしくて」と云っていただけに、どう発心して急結婚する気になどなったのかと、友達たちは好奇の眼を光らせ

ていたが、本人に会って見ると、思いの外乗気で、級友達を

前に置き、自分から立上って一場の挨拶を述べたものである。

「ママが探して来て呉れました。ママが見合に行けというので行つて見ると、まんざらでもないのです。もつともそれは外形だけで、中身がどういうものかは解らないのであります。この辺で一応落著いて見ようと思ったのであります」

「ヒヤヒヤ」と誰かが云った。みんなはどつと笑い崩れた。

「まあ、この子はあきれた子だよ、わたし皆さんに云おうと思う事を、自分でみんな云ってしまった」と愛子のママは眼を円くしたが、併し嬉しそうであり、満足そうであった。

料理はママが晶尻の神田の中華料理からコックが出張して作り、娘たちにもこれなら飲めるだろうといつて老酒が副えられたので、娘たちはそれを飲んで、はしゃいで、大いに喋った。

「ねえ、どんなもの、結婚で。……教えてよ」と愛子はこの中で唯一の既婚者である幸枝に向つて訊いた。

「うふふふ。今に解るわよ」

「愉快なもの？」

「そうね、愉快も不愉快もないわね。そんな事を考える暇のないものね。——子供が出来る、もう子供でいっぱいよ」「そんなもの。つまらないものね」

「ふん。……つまるもつまらないも、そんな事を云っている暇のないものよ」

「そんなものか知ら」

「まあ、そんなものよ」

幸枝はくすぐつたそうに笑つていた。他の娘たちのように冴え冴えした顔色でなく、多少黄味を帯びたようにむくんでいるのは、或はもう第二の子供がお腹に宿っている兆候かも知れなかった。そう豊かでもない家に生まれ、平凡な結婚をしたらしい彼女は、何処かに世帯じみた煤けた感じを持つていた。

大塚さき子は芸術大学のピアノ科に通っているが、友達のために「結婚行進曲」を弾いた。それから愛子の弟の高校に行っている勇が記念写真を取るといつて、愛子を見ん中にして写真を取つたが、その写真にはママも加わつた。まだ少年ながらに、一人前の写真屋のようにフラッシュを焚き、何でもカメラも相当好いカメラであるようであるが、そういう道楽にも自由に金を使わしているところが、この一家の豊かさを思わせた。

帰りに級友達はつれ立って駒井家を出た。晩春の夜で、潤いを帯びた空気が若い人達の心を少し感傷的にしていた。それに友達の間結婚という事が彼女等の感情には更に一つの刺激

であった。

「とうとう愛子も結婚するのね」と久我みどりが云った。

「少々他愛もなくと云いたいところもあるわね。あの人こそ素晴らしい恋愛でもするかと思つていたのに……」

「まずまず無難に納まり申候というところよ。まあお目出度いというのがわたし達のエチケットよ」と春日タマ子が引取つて笑ひながら云つた。

五人は神楽坂の喫茶店で珈琲を飲み、それから坂下で都電に乗る者と国電に乗る者との二手に別れた。小森田みち子は国電組なので、大塚さき子と吉葉幸枝と三人で飯田橋駅に入つて行つた。そして又ブラットフォームで、お茶の水に行くさき子と別れて、みち子と幸枝とは中野行きに乗つた。さき子の乗る電車よりも二人の乗る電車の方が先に来たのである。併し早く結婚し、早く世帯じみてしまつた幸枝とは、みち子は肩を並べて腰を下ろしても殆んど話題がなかった。

「お子さんは幾つ？」などと訊いて見る興味はみち子にはなかったし、又そういう事を社交的にでも云つて見るような性質を彼女は持合わしていなかった。

そこで黙つていると、寧ろ幸枝の方からお世辞を云つた。「好いわねえ、あんたなんかいつまでも自由で、学問をしていらつしやれて。わたしも大学に行きたかつたわ。早く結婚なんかしてしまつと、女はもう駄目ね」

さつき愛子の質問にやにや笑つていた時とは全然違つた調子である。さつきは結婚生活もまんざらではないというように、愛子に対して少々先輩ぶつた思ひ合せぶりの態度を執つていたのに、今はみち子に対して、早く結婚してしまつた事を卑下したような事を云う。もっともそれは何もほん気で卑下しているのではなく、儀礼的にそんな事を云つてゐるのかも知れないので、みち子もお座なりに答えた。

「どっちが好いか解りやしない事よ。大学なんて云つたつて、どれだけの学問が出来るのだから……」

併し儀礼的に答えたつもりが、口に出して見ると、みち子に取つては相当実感を持つた言葉になつた。大学に入つた最初こそ毎日講義にも出席出来たが、近頃は出席する余裕がなくなつて来た。という意味は、大学に入つてから彼女の家の没落が目立つて来たからである。

彼女は最初は世田谷の家から学校に通つてゐた。併しその家も手放さなければならぬ事になり、母は大阪にいる兄の家に引取られて行つた。そして今みち子は兄から月に四千元宛学資の仕送りを受けているが、四千元では学資どころか女一人が暮せるものではない。そこで彼女は始終いろいろアルバイトを探してやつて行かなければならないので講義にも思うようには出席出来ない。――併し今そういう事を幸枝に語るうという気は起らなかった。どういふ結婚生活を送つてい

るのか、詳しくその実情は知らないが、この平凡に結婚やつれをしてしまっている昔の友達とは、いつかもう共通の話題がなくなってしまうような気がするのである。……

千駄ヶ谷で幸枝が下車してしまうと、みち子は一人になり、それから新宿まで乗って行って、新宿から更に京王電車に乗り換えるのであるが、彼女はそこで思いついて、新宿の表通までちょっと出て行き、パンを買った。自分ばかりが愛子のところで久しぶりで栄養の沢山ある支那料理を食べた事が、彼女と一緒に暮している二人の友達に対して気の毒な気がしたので、彼女はパンの外に思い切ってソーセージを奮発する事にした。このパンとソーセージをぶら下げて帰れば、凱旋將軍のように意気揚々として帰れるのである。

二

みち子と同じH大学の同級生の二人の友達と家を借りているのは、下高井戸の駅から約十分ぐらいの距離のところであった。六所神社の方へ向った道で、十時を過ぎると相当に淋しい。もっとも、晩春で空気はしっとりし、潤んだ空に何処となくほの明るさがあるので、寒い頃のような薄気味悪さはない。

彼女は小さく口笛を吹きながら歩き出した。

「やあ、今お帰りですか？」と後に男の声がした。

みち子は本能的にぎょっとして立止り、警戒するように薄暗の中をすかすようにして見ると、

「僕ですよ。御近所の山形ですよ」と慥えた彼女に安心を与えようとするように、その声は少し笑いかけた。

「ああ、山形さんですか」

「一緒に電車のようでしたな。淋しい道ですから一緒に行きましょう」

それは彼女たちの家から尚一町ほど先にアトリエを持っている洋画家であった。血色の好い始終にこにこしている独身者で、三十をもう越しているであろうが、何処の流派に属しているのか彼女は知らなかった。六所神社あたりを散歩すると、この画家がその辺の風景をよく写生しているところに出会う事があるが、人がどんなに後に立っても、平然として堂々とした体軀でカンバスに向っている態度は立派であった。いつか近所なので、みち子たちと顔見知りになったが、会うと、「今日は」と云って無邪気な笑顔で挨拶するのである。そればかりでなく、夕方になるとこの画家は、その近辺を何が好きなのか、如何にも楽しそうな顔をして、

「お晩になりました」と云って会う人毎に挨拶しながら歩きまわるので有名であった。それが爺さんであれ、婆さんであ

れ、よその女中であれ、八百屋であれ、酒屋であれ、誰にも同じ調子で「お晩になりました」と軽く頭を下げて行き過ぎるのである。「お晩になりました」は東京の「今晩は」であるが、何処の方言であらうかとみち子は日頃から考えているのであった。

二人は並んで歩き出した。

道の左手の或屋敷の森の間から月が上り、路面はほの明るかった。空には白い薄い雲が多少あり、それが月の面を掠めて、その光を薄暗くしたり又明るくしたりする。暑くなく寒くなく、空気の肌ざわりは柔かでの上なく快い。みち子はこの季節のこんな晩にぶつかると、たとい生活はどんなに貧乏であっても、やっぱり生きているのは楽しいという気持ちになる。それに空地や樹立の多いこの附近は、土や草や青葉の匂いがして、何か感覚が新鮮にさせられるような気がするのである。

その土や草や青葉の匂いにまじって、並んで歩いて行く画家のジャンパーから、男くさい匂いが彼女の鼻に漂って来た。その匂いから彼女はもう直き結婚する愛子の事を考えていた。愛子はこういう匂いと朝晩一緒に暮すのであろうか。

「毎日学校ですか」と画家は訊いた。

「ええ、毎日と云って……毎日学校に行くわけには行きません」

「ほう、それは何故ですか」

「何故って……」と云ってみち子はちょっと言葉を切った。

この肥った栄養の充ち足りたような画家には、近頃の大学生は男にしても女にしても、気楽に毎日学校に通えるような余裕のない事など、察しがつかないのだらうと思うと、少し皮肉を感じて、「学校の時間を毎日きちんきちんと出ているような暇なんかないんですの」

思わず「ですの」という女らしい言葉が、相手が男なので口に出た事に気がつくのと、その事にも彼女は皮肉な苦笑を感じた。伊都子の主張で、「ですの」とか「ですわ」とか「ですのよ」とかという語尾は一切止めようという事になっていたので、彼女等の間ではそういう言葉は使わなかった。「そういう云い方は、女性が男性に媚びた封建時代の名残りだから聞くに堪えない」と伊都子は云うのである。

「ふうむ、そうですか。そんなにお忙しいですか。学校の外に何か研究でもされているんですか」

鈍いな、この人。——とみち子は腹の中で考えながら、

「みんな学校よりもアルバイトの方が忙しいんですよ」と画家に向って投げつけるように云った。

何もこの画家に向って腹が立つわけではない。併し「学校よりもアルバイトの方が忙しい」

という言葉の意味が腹が立つのである。そんな言葉を口に

しなければならぬのが腹が立つのである。

「はあ、そうですか。なるほど、解りました」と画家は大きくうなずいたが、併しさぞ驚くだろうとみち子が予想したようには、一向驚いた様子も見せなかった。「アルバイトって、一体どんなアルバイトです」

「いろいろよ。でも、余り好い口はありません。わたしは今或弁護士のところへ筆耕をやっています」

それは五十六七になる肥った弁護士で、所謂三百代言上りという感じの男であるが、傲然と椅子に腰を下ろし顎で人に指図しながら、「我輩」という言葉を使うのを、彼女は忌々しく思い出した。債務者の依頼は金にならないからと云つて、債権者側の仕事を主として引受け、無慈悲に金を取り立てるので、敏腕という評判であつた。というよりも、敏腕として評判だと自分で吹聴しているのである。

日比谷から数寄屋橋の間の右手の裏側に、その近辺の新しい建築物から取りのこされたような古い木造の貸事務所がある。昔ヤマカン横丁と云われたものの名残りであるが、その二階にその権田弁護士の事務所はあつた。彼は債務者たちをそこに呼びつけて始終横柄な口を利いていた。

「それは君、見解の相違だよ」とか「あつははは、法律は人情じゃないよ」とかいふ彼の大声が、カーテンの裏側で筆耕をやっているみち子の耳に屢々聞えて来た。

「そうですか。それで何ですか。あなたと一緒にいられる他の方もみんなアルバイトをやっておいでですか」

「ええ、みんなやっています。一人は行商、一人はパチンコ屋……」

「ほう、パチンコ屋」とこの「パチンコ屋」には興味を覚えたらしく、画家は大きな声を出した。実際「パチンコ屋」という言葉には何がなしに一種のユーモアがある。そのユーモアを画家が感じているように思つたのでみち子も笑い出し、「パチンコ屋って、暢気そうに見えて、とても忙しくて、目のまわるような労働なんですって……」

毎晩遅くへとへとに疲れて帰つて来るしげ子の顔を彼女は思い出した。しげ子は疲れるためか近頃は少し神経質になつていららしていた。

「そうですか。そうすると、なかなか好いアルバイトは何処にもないんですね。僕も今まで随分やりましたよ」

「あら、あなたが？」

みち子は驚きの声を上げたが、なるほど、この人は自分でもやったから他人のアルバイトの話の聞いても驚かないのだな、と思つた。それでは何苦勞なく絵を描いていられる身分では、この人もなかったのであろうか。それにしては、何とのんびりと悠揚迫らざる顔附をしているのであろう。

「僕は幡ヶ谷の小さな町工場に行つたのですが、特別な技能

がないので、朝から夕方まで歯車をまわしましたよ。八時間働くとホワイト一本買えました」

「まあ」

「僕は体力があるので、肉体労働は平気ですが、何しろ昼間が潰れると絵を描く時間がないのでね。僕は主として風景を描いているものですから。それで止めました」

「絵はお売りになりませんの」

「絵が売れば理想的ですが、絵は売れませんな。自分では名のある連中に負けないつもりですが、名がないと売れませんよ。僕は新宿の道端に『売ります』と紙を貼って絵を並べて見たんですが、誰も買ってくれませんでしたよ。あつははは」

その朗かな笑い声に、みち子も釣られて「おほほ」と笑ったが、この榮養の好きそうな男も、そんな風に貧乏なのかと思うと、同じ種族に対する親しみを急に覚えて来た。

「でも、アトリエがあたりだから結構ね」

「あ、あれですか。あれは友達のアトリエだったんですが、死にましてね。それで僕が借りているんですよ。田舎の物持なので、僕に勝手に住まわして呉れているんですよ」

併し近頃はやっと一つのアルバイトが見つかって、暫く息が吐けるといふ事なども彼は語った。それはアメリカの兵隊の写真から肖像を描く事であるが、注文を一手に引受けてま

わして呉れるブローカーがあるので、中間で相当搾取されているのであるが、兎に角どうやら食べても行かれるし、絵も描けるといふのである。

「それで当分息はついてますよ。いつまで続くか解らないが、併し後の事は僕は考えない質なので、その中に又好い事があると思っていますすよ」

「それでいらいらする事はありませんか？」

「ええ、まあ、ありませんな」

それだからこの人は夕方になると、嬉しそうににこにこして、近所を歩きまわり、会う人毎に「お晩になりました」などとい々挨拶して歩けるのであろう。

「そうか知ら。わたし達は時々とても腹が立って来たり、悲しくなつて来たりするんですよ。月に一遍ぐらい、三人とも憂鬱になつて堪らなくなると、焼酎を買つて来て、三人でぐでんぐでんに酔つ払つてやるんですよ」

「ほう、ヤケ酒ですか」

「ええ、ヤケ酒ですよ」

「それは無駄だな。僕も焼酎を飲みますが、酔うと愉快だから飲むんで、ヤケで酔つ払うなんて、つまらない話ですな」

「あなたにはお解りにならないのよ」

「僕には解らないな」

「そうよ、お解りにならないのよ」

みち子は反撥しなくなった。この男には不平も不満もないのであろうか。こんな風にして、自分たちが貧乏している事が不合理と思われないのであろうか。「やっぱり鈍感なんだ、この人は」とみち子は考えたが、併し反撥してやりたいと思いが、心がとげとげしくは少しもならなかった。——何しろ気候が好過ぎる。こんな空気の肌ざわりでは、不機嫌にはなれない。こんな晩に道伴れになった男に悪意などもあるものではない。

「こんな晩にはうっかりすると、側を歩いている男を、無暗に好きになってしまうかも知れないぞ。警戒を要する」

彼女はこんな事を考えて微笑していた。

三

娘たち三人が住んでいる家はその往来から一寸引っ込んでいた。昔は百姓家で格子戸もなかったらしいのを、後からつけたらしく、その格子戸を入れて障子を開けると、とつしが四疊半、その奥が八疊と、たった二室の小さな家であったが、近頃の東京の住宅難から云えば、不平を云うべきものではなかった。この近辺が開けて家が建ち始めたのは太平洋戦争の五六年前からだというから、凡そ十六七年になるであらうが、この家は恐らくそれよりも前から建っていたような古びた家であった。ちょっとした事で、快活に表現する事の好きな伊都子は、「これは屹度この近辺の草分けだよ」と探した時云ったので、彼女等はみんな「われ等の草分けの家」とそれと呼んでいた。

天井は低く、柱は少し曲り、壁はぼろぼろになり、畳も赤黒く煤けてところどころ擦り切れていたが、障子だけは一月程前の日曜に奮発して三人で貼りかえたので、この暗い室内を多少明るくしていた。

みち子、伊都子、しげ子と、今まで名ばかり呼んで来たが、その姓名を云って見ると、小森田みち子、佐伯伊都子、染井しげ子、とこの三人の女大学生は奥の八疊の部屋に机を並べて起き伏していたが、その三つの小さな机以外には、家具らしいものは殆んどなかった。床の間は本箱代りになっていて、そこに三人の本が積み重ねてあった。唯赤い模様の人絹の座蒲団が三つあるのと、四疊半の方に小さな鏡台が一つあるのとが、僅かに若い娘たちの住んでいる家である事を示していた。それからもう一つ、それは床の間の本の積み重ねの横に伊万里の染附の花瓶が一つ置いてあり、それに附近の野の花が始終活けてあるのは、それはしげ子の心遣いであった。「唯今」

みち子がそう云いながら入って行くと、伊都子は机から振